
正義の味方と不幸な少年

春ノ風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と不幸な少年

【Zコード】

N8213S

【作者名】

春ノ風

【あらすじ】

正義の味方とシリーーズ第三弾。こんな小説もあっていいんじゃないかなと思って気晴らしに書きました。我らが衛宮士郎がPia キャロットの世界にいたらといつエフ物語です。

(**温****馨****也**)

體驗上 乃ニアリ。

「はあ

公共の場であるにも関わらず、鴨下大翔は人目を気にせず大きくため息をつく。

「…………はあ

一度目ほどではないにしろ再びため息をつくその表情は深刻な状況であることを物語っている。

「三億か…………」

大翔はため息に続けて小さく呟いた。

そう、彼は生まれもつての不幸体質で、今まで多くの不幸な体験をしてきた。そのなかでも、今回は群を抜いて最悪な事故が起きた。

先日受かったアルバイト、Piaキャロットにてガスの元栓の不始末にて店は爆発。奇跡的に死傷者は大翔を除いてゼロではあったが、その結果、大翔の元には三億という借金であった。

だが、Piaキャロットのオーナー、木ノ下オーナの温厚により水萌学園で新しくオープンするPiaキャロットの店長を任せられることになった。

詳しくはPiaキャロット本編を参照して欲しい。

「…………落ち込んでる暇はないな。早く七人見つけないと」

大翔の言つ通り、店長になるには条件をクリアしなければならない。
それは『アルバイトを七人集めること』

一見、簡単そうに見えるがこれは果てしなく難しいのだ。

水萌学園特区内では水萌学園の生徒しか働けない。四月ならまだしも、今はほとんどの生徒がバイトか部活をしている。故に、大翔にとって七人もアルバイトを見つけるのは至難の業なのである。

…………だが、その前に

「なぜだ？なぜほとんどの寮が満員なんだ！？」

またしても人目を気にせず叫ぶ大翔。周りからは変人を見るかの様な目で見られているが今はそんなこと気にしていられない。店長云々よりも先にここで生活出来るかどうかが問題であるのだから。

「ああ、あつといつ間に暗くなつてきた」

全ての男子寮を回り終えて、公園に腰掛けていると辺りは暗くなつてきた。それでもちらほらと学生は見掛ける。

「いいなあ。帰る家がある人つて」

普通の人ならこぼさないような愚痴をつい口走つてしまつ。だが、当然のことながら聞いている人など誰もいない。

「くそッ、この世には神も仏もないのかよーー！」

「うるせーぞ馬鹿野郎！！」

「おう、す、すみません」

夜なのにまた叫んでしまった結果、文句だけが返ってきた。それに対しつい反抗していまいそうになつたがどう考へても悪いのは自分なので素直に謝つた。

ぐううう

もつ少し何度もなるだろうか。大翔のお腹から大きな音が鳴り響く。

人にヒットポイントという数値があるなら今の大翔は確実にゼロだろ？

「うう、死んだら化けて出てやる~」

一体どこの誰に化けて出て来るかは甚だ疑問ではあるが、大翔について現在の状況は空腹と疲労によつて本当にピンチなのであらう。

「…………んた、…………ぶか？」

目を閉じた辺りで、誰かが何か言つてる氣がしたがもう目を開ける気力もない。

そつして、大翔の意識もそのままシャットダウンした。

+ ? + ? +

生徒会の手伝いをしていたら、こんなにも遅くなってしまった。いつもは通らないが学校から寮までの近道として公園の中を通る。

「くそッ、この世には神も仏もいないのかよー！…」

「んー？」

今何か変な呻き声の様な叫び声が聞こえた。急いでその声の発生源に行くとそこには一人の男が力無く倒れていた。

「あんた、大丈夫か！？」

声を掛けでみても反応がない。もしかしたらと、嫌な予感が過るが、その予感も憂鬱に終わる。

『ぐぐううう～』

「…………まさか腹が減つて倒れてたのか？」

聞いていたかも返事を返すかのように男の腹が鳴る。

「見かけない顔だけど、このまま置いてくつてわけにはいかないしな…………」

事情を話せば寮長もきっとわかつてくれるだろ？

+ ? + ? +

トントンとリズミカルに鳴り響く音が聞こえ、次いで焼き鮭のいい香りがしてきた。

「……んが！？」

寝起きの一発目に意味不明な言葉を発してしまった。…………
といひで気がついた。どこだここ？ 確か公園にいたはずだけど……
・・・

「お、もう起きたのか？」

声のする方を向けば赤髪の水萌学園の生徒がご飯、味噌汁、焼き鮭、
ほうれん草のおひたしを机に並べていた。

「あんた、腹が減ってるんだろ？」

「え？ まさかこれって？」

学生の言ひように驚きながらまさかと思い、料理に指を差してみると
学生は軽く頷いてくれた。

「ああ、簡単なもので悪いが食べてくれたら嬉しい」

・・・・・ああ、天国の父さん、母さん。この世には神も仏もない
ないけど天使はいるみたいですね。

全く誰かもわからない、しかも自分で言つのもなんだがかなり怪し
い不審人物にここまでしてくれるこの学生に涙が出てしまいそうに

なるがそこは我慢して用意してくれた食事に手を付ける。

「ええ！？びっくりした。どうしたんだいきなり？」

「どうしたんだって俺が言いたいよ。これお前が作ったの？」

「あ、ああ。全部俺が作つたぞ！」

「すげえ。久しぶりのまともな食事だっていうことを抜きにしてもかなりのレベルだよ

「久しぶりの食事にて……もう少しうまく生活してたんだな」

何かつぶやいていたが聞こえなかつたので反応はせず、今は田の前の食事を堪能することに集中する。

だって本当に美味しいんだもん。

そして、十五分くらいで食べ終えた。

「おや、美味か二た。」

ようやく食べ終え、感謝の印にどうぞうそと料理を作った人物に再び向き直りそう言った。

「お粗末さま」

そう簡潔に、だが嬉しそうに返事を返して来た。

「ああ、それと俺の名前は衛富士郎」

「衛富士郎といつ学生に血口紹介されてよつやけに立地お互いの名前を知らなかつたことに気がついた。」

「血口紹介が遅れたな。俺は鴨下大翔。明日から水萌学園の学生になるんだ」

遅れながらも一通りの血口紹介をすると衛富はなるほどとこつた感じで手と手をぽんと合わせる。

「どうしたんだ？」

「いや、一応俺は生徒会の手伝いとかしててその関係で学生のほとんどどは把握しているんだが鴨下のような学生は見かけたことがないんでな。しかし珍しいな。こんな時期に編入なんて」

「いや・・・、色々あつたんだよ。そつ、色々な・・・」

つい遠くを見るような目で見上げてしまう。だつてそういうしないと涙が出てしまってやうになるんだから。・・・主に自分の運の無さに。

「そつか・・・、大翔も色々と大変なんだな」

そこで何も聞いてこない衛富に感謝だ。変に今までの経緯を話したら泣くのを我慢した意味がなくなるし。

「どうで大翔は今日どうする?」

衛宮に尋ねられて腕時計の時間を見てみるともうすでに夜の九時を回つており、あと十分もすれば十時になつてしまつ時間だ。こんな時間に寮を探しても空振りに終わるだけだらう。

「どうじよつかと考えていたら、衛宮が嬉しいことを言つてくれた。

「なんなら今田泊まつて行くか？」

「え、いいのか？」

今日出会つたばかりの俺に何故ここまでしてくれるのだろうか？正直こんなに至せり尽くせりでは何か裏があるのでと疑つてしまつ。そう考へてしまつのも不幸を呼び寄せる体質の俺なのだから仕方ないと思つ。しかし - -

「なに、困つた時はお互ひ様だろ？」

そんな表裏のない表情を見て、これは純粹な好意によるものなのかと判断した。同時に疑つてしまつた衛宮への罪悪感も芽生えてしまう。

「遠慮なんかしなくていいぞ。布団も余分にあるんだから

口籠つていると、衛宮は違う捉え方をしたのかそんなことまで言つてくれた。

「ありがとう。じゃあ、今日は衛宮の言葉に甘えることとするよ

もはや断る理由なんてないのでから素直に衛宮の好意に甘える」と

した。

ありがとう、エンジェル衛宮。

この御恩は決して忘れないから。

(後書き)

・・・続かない。だって三つ書いてるのに無理！！しかも、何よ
り内容知らないから無理！！体験版やつただけですから、残念！！
(死語)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213s/>

正義の味方と不幸な少年

2011年8月1日23時01分発行